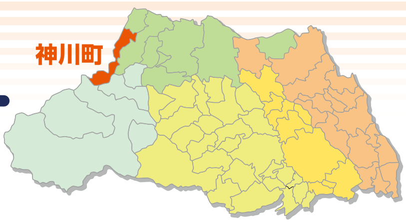
地域経済の活性化を語る

県内首長リレーインタビュー㉚



神川町　清水　雅之　町長(63歳)

「耳で聴き、目で見、足を運ぶ。」
何事も現場主義！の清水町長。

神川町は、2006年１月に旧神川町と旧神泉村の合併で誕生し、新制神川町として今月でちょうど10年目を迎える。

都心から約80㎞という立地条件にあり、関越道や上信越道のインターチェンジも近く、交通アクセスにも恵まれているため、既に工業団地（児玉工業団地）が整備されている。産業振興については、企業誘致と同時に町内に多くある農地を守りつつ、観光を切り口とした地域活性化を目指す方向にシフトさせた。

清水町長は就任前に町会議員を四期務めており、当時から「出来ることはすぐに実行！」をモットーに、就任後も積極的に町制改革を推進してきた。

■官民協働のまちづくりの実現を

町の観光拠点のひとつが、地元産の檜をふんだんに使用した町営の「冬桜の宿 神泉」だ。2005年に開業したものの、利用率が上がらず赤字が続いていたため、2012年11月から指定管理者制度を導入。現在はＪＴＢ関東が運営にあたっている。宿のＨＰには、周辺のハイキングコースや四季の花暦、イベント情報、歴史スポットなど、民間のノウハウを駆使したアイデアとデザインが盛り込まれている。

また、神泉地区の観光の名所「城峯公園」も来月から指定管理者制度の導入が決まっている。公園内には約600本の冬桜が植樹されており、10月下旬から12月上旬にかけては冬桜の開花と紅葉が重なり、絶好の観光スポットとなっている。この城峯公園の運営に民間資本が導入されることで、「冬桜の宿 神泉」同様、さらなる活性化が期待される。

神川町といえば梨を忘れてはいけない。梨は町のイメージキャラクターにもなっており、毎年８～９月には、国道沿いに50か所以上の梨の直売所が設けられ、通称「梨街道」と呼ばれるほどだ。町では、県本庄農林振興センターの指導のもと、生産農家や地元のレストラン等と連携して梨の商品開発を行い、一昨年、シャーベット「白い宝石」を誕生させた。続いて、梨をきゅうりやとうがらし等の地元野菜と漬け込んだ「なっちゃん漬け」を地元の民間企業が開発。醤油ベースに梨の甘みが広がる新感覚のフルーツ漬物は、神川町の新しい味・食卓の友となっている。

シャーベットも漬物も、地元の企業が開発し、町が販路拡大を支援した。こうした将来の町づくりには欠かせない官民協働の体制を今後も積極的に推進していく予定だ。

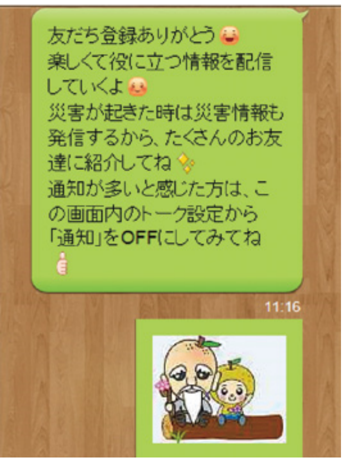
■視点を変えて地域の魅力を発信

自然豊かなこの地に、年間を通じて多くの観光客が訪れてもらえるものと期待しているのが、ＪＡＦ（一般社団法人 日本自動車連

◀山並みを遠望し、眼下には神流湖を望む「冬桜の宿 神泉」。
四季折々の花や緑、自然を思いっきり満喫できる町自慢の宿。
地元産の三波石を使用した風呂は、日帰り入浴も可能。

盟）埼玉支部との包括連携だ。前述のように神川町周辺の道路網は国道，県道などが５路線、近隣には関越道と上信越道も通り、ＩＣもある。年間10回発行されるＪＡＦの情報誌（385万部／回）を発信源に、地域の活性化につなげたいとしている。ＪＡＦとの包括協定は県内でも初の試みであったが、観光客が着実に増加しているという。

また、県境を超えての新しい取組として、隣接する群馬県藤岡市と連携した広域的な観光も推進中だ。神流川を挟んだ藤岡市の「桜山公園」と、神川町の「城峯公園」を「二大冬桜の里」として位置づけ、藤岡市の世界遺産「高山社跡」を含めた観光ルートを広くＰＲしていくという。



▲スタンプは町民の投票で決定。今後もどんどん増える予定だ。

さらに昨年１月からは、「LINE」を利用した情報発信サービスがスタート。26人の若手役場職員が業務終了後の時間を利用して町のＰＲのため、神川町のゆるキャラ「神じいとなっちゃん」のスタンプを制作。町の情報に親しみやすいスタンプを利用することで、若年層の町政への興味・関心の高まりにつながることを期待している。

■小さくても輝けるまちづくりを目指す――

神川町では、「安心して子どもを産み育て、地域みんなで子育てを支えるまち」をスローガンに掲げ、これからの町を支える次世代等を対象に、さまざまな施策に取り組んでいる。

神川町の概要

人　　口（平成 22 年国勢調査）	14,407人
世 帯 数（同上）	5,001世帯
平均年齢（同上）	45.1歳
生産年齢人口比率（同上）	67.1％（9,372人）
面　　積（同上）	47.42平方キロメートル
名目町内総生産(平成23年度市町村民経済計算)	425億9,300万円
事業所数（平成 25 年工業統計）	54事業所
製造品出荷額等（同上）	734億7,441万円
事業所数（平成 24 年経済センサス）	499事業所
年間商品販売額(平成 19 年商業統計)	128億6,039万円

▲町の木「冬桜」は、年に２回可憐な花を咲かせる。夜になるとライトアップやイルミネーションが施され、幻想的な景色が広がる。

子育て世代には、医療費や給食費、住居費などの経済的負担を軽減し、安心して子育てができる環境づくりを行っている。神川中学校の改築工事では、町有林の木材を使用した特別教室棟や体育館を新設して、学校や保護者、地域が子どもたちを見守り、触れ合い、交流ができる共有スペースを設けた。合併後に教育施設の統廃合を行った一方で、こうした教育環境の充実に力を入れている。また、中学生に町政への関心と理解を深めてもらおうと、夏休みを利用した「中学生議会」を実施している。観光振興や環境政策について、中学生ならではの新鮮で貴重な提案が数多く上がっている。

現在、神川町では、地価の安さ等の利点から「サービス付き高齢者向け住宅（サ高住）」の建設が増加している。「サ高住」の建設は、社会環境等を考えると、今後も増加し、首都圏からの人口流入が容易に予想される。これに伴い、医療費などの財政問題や地元住民と転入者との融和といった新たな地域コミュニティづくり等、さまざまな課題がある。高齢化社会では、介護や認知症等の避けて通れない大きな課題が伴うが、これも視点を変えて考えれば、元気で健康なうちに移住し、コミュニティを形成できれば、農業を含めた雇用の創出にもつながると考えている。

次世代を担う子どもたちが「神川に生まれて良かった、これからも住み続けたい」と思える町づくりを推進する一方、新たな「高齢者ケアタウン」の先駆者となれるよう、町独自の地域資源を活用した取組をこれからも提唱し、実現していく予定だ。

次回は、神川町と同じ山村振興地域である毛呂山町の井上健次町長にバトンを渡します。